

企画展「<sup>やまぢゃわん</sup>山茶碗」—雑器の系譜と素朴な味わい—

山茶碗は平安時代後期から戦国時代初期ごろまでの約400年間に、東海地方で生産された茶碗と小皿などの素朴な無釉の陶器です。古窯跡の盗掘が盛んに行われた昭和時代初期ごろ、窯跡を求めて山へ入った人たちによって無釉の茶碗が大量に散乱している様子が度々発見されたことから、“山”茶碗と呼ばれるようになりました。主に食器や調理器具として、身分を問わず誰もが気軽に使うことのできた日常雑器だったといえます。本展では、美濃窯を中心に猿投・瀬戸・常滑・美濃須衛・恵那・中津川といった生産地の山茶碗やつぼ、鉢類、その他の希少な器種を展示し、山茶碗の歴史とその素朴な魅力を紹介します。



下石西山2号窯から出土した山茶碗（同館蔵）



長湫1・2号窯から出土した山茶碗（同館蔵）

## カガクへのトビラ Vol.3

核融合科学研究所 / 総合研究大学院大学 (☎ 2222)

## パソコン何台分？スーパーコンピュータの実力

スーパーコンピュータは、普通のパソコンと一体何が違うのでしょうか？スーパーコンピュータとは、何千台、何万台もの強力なコンピュータ（この1つ1つをノードと呼びます）が高速通信でつながっている物です。核融合科学研究所の「プラズマシミュレータ」は、なんと2,592台ものノードの集まりです。

スーパーコンピュータは、1台のコンピュータを使う場合と比べて使い勝手がずいぶん違います。人間が大勢で共同作業するときも誰がどこの部分を担当するか、現在どこまで作業したかを連絡しないと作業が混乱してうまく進みません。そこでスーパーコンピュータでは、2592台のノード同士がすぐに連絡を取り合えるように高速通信が用意されています。

プラズマシミュレータは2,592台もの強力なノードと高速通信のおかげで、1秒間に最大で2,620兆回もの計算ができます。これは市販のパソコンのほぼ10万倍に相当する速さです。言い換えると、パソコン10万台分の計算をスーパーコンピュータ1台で行えるということです。このような強力なスーパーコンピュータで、高温のプラズマがどのように運動するか日々計算が進んでいます。毎年秋に開催している同研究所のオープンキャンパスでは、スーパーコンピュータを間近で見られる企画を用意しています。ぜひお越しください。

核融合科学研究所のスーパーコンピュータ  
「プラズマシミュレータ」